
[短編集]心音響く、空の下

伊吹 理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「短編集」心音響く、空の下

【Nコード】

N6208Z

【作者名】

伊吹 理緒

【あらすじ】

迷い子は、生への問いを死と云う答えで返してしまう。苦しみ悲しみ引き連れて、迷い惑って眠りいく。一人の迷い子、一人の案内。違う時間の空の下、心音響かせ生を知る。これは自作短編（或いは掌編）集です。各話に明確な繋がりはないので、好きな処からお読みください。

風死す炎昼に馬鹿が笑う

自宅を出ると 風が死んでいた。

「……」

あと数日もすれば九月に入るというのに、燦々と差す太陽は未だ衰えを見せず、今日も今日とて精一杯に振り絞った熱い陽光を地に落としていた。

「……風死すか」

しかし、たとえ生きていたとしても涼やかには踊れないだろう。直向な太陽の情熱が、きつと焦がしてしまう。

「……」

右腕の時計は十三時一分を差す。

自宅を出てからまだ一分。一分しか経っていないのに額の表面には汗が粒を作りだし、着流している着物の中が体温と陽光により蒸されていた。

暑さは怠さを生み、足に伝わる。地につく両の足は枷が在る様に重く、歩みは徐々に遅滞した。

それでも止まる事は無い。止めても灼熱が消えるわけではないし、開放されるには寧ろ進む以外に他は無い。

自宅近くにある墓地の細いわき道を歩く。

歩く度、ざつ、ざつ、と、雪駄が乾いた音を経て熱されたアスフ

アルトの地面に擦れた。

「……」

ざっ、ざっ。

「ざっざっ」

それは少年の口で擬音となった。

「ざっざっ。……風情だね」

風情だろうか。いや、風情なのだろう。ああ、風情だ。そう思うなら。

「……少年、そんな所で寝転がっていては、道行く人の迷惑だぞ」

わき道を抜け、墓地の本道。本道と云っても道幅は狭い。故に、その中心に大の字で寝転がられると迷惑至極。

「迷惑かな？　ここ、あまり人来ないけど」

確かに此処は常時人通りが少ない。少ないのも頷ける。本道は墓地と墓地に挟まれ、如何にも陰気なのだ。　　と言えば罰当たり者だと何処かの爺さん婆さんに叱咤されるであろうか。だが、誰も好き好んで墓地に挟まれた細道など通りたくは無い、と云う心情も事実。

「しかし、人なら此処にいる。さっきは知らんが、今はいる」

好んでこの道を使う者。

「あ、そうか」

故に迷惑至極。

「少年。君は何故、此处で寝転ぶ？」

「寝転がっているわけじゃない」

「寝転がっているではないか」

気持ち良さそうに真青な天を仰いで。

「違う。倒れているのだ」

こちらを見もしない。

「同じだろう」

違いが有るとすればそこに自分の意志が有るか否か。しかしどちらにせよ道を塞がれた他者からすれば同じ事。

「塞いでないよ、僕の左右には十分な幅がある、二輪や歩行者は通れるだろう？」

「しかし車は通れん」

只でさえ車が通るには心許無い細道だ。二台がすれ違うのにも徐行或いは一時停止しなければならぬ場所の真ん中を占領するなど

言語道断。

「それで良いんだ。これは八つ当たりだから」

「八つ当たり？ 車に対してか」

「ああ」

どこからか蝉の鳴き声が聞こえる。

「君は車が憎いのか？」

「別に憎くは無い。ただ駄々をこねてるだけだ」

「駄々？ 八つ当たりではないのか？ 意味がわからんな……」

「車に轢かれた」

蝉は、その命の声を静かに止めた。

「轢かれた……それで倒れているのか。救急車を呼ぼうか？」

見た所外傷は無さそうだ。血も流れてはいないし、四肢も定められた位置を確りと守っている。だが交通事故の場合、外の傷より内の傷の方が怖い。内臓を痛めてるかも知れないし、もしかしたら頭を打ってるかも知れない。素人目に判断出来ない事は専門家に頼むべきだろう。

「いや、いいよ。どこも痛くないし」

「今は痛くなくても、後々どこかが痛み出すかも知れないぞ」

むち打ちなどは症状が遅れて出て来る事が多い。むち打ち程度ならまだ良いが、頭を打っているなら脳内出血している可能性だって有る。

「うっん、大丈夫だと思うけどね。頭も打ってないし、そんなに強い衝撃じゃなかったから」

「強情だな」

「いや、我俣なのだ」

「同じだろう」

「ちょっと違う」

額から一滴の雫が地に落ちる。何とも……暑い。

「それで、轢いた奴はどこへ行った？ 逃げられたか」

「うん」

そうでなければ少年がここに一人倒れているわけが無い。助けを呼びに行っているのかも知れないが、被害者が逃げられたと云う認識をしているのならそうなのだろう。

「それで腹が立って駄々をこねているわけか」

「うん」

少年の横にしゃがみ込む。顔を覗いた。

「……何だよ、おっさんは野次馬か？」

少年はそこで漸くこちらを向く。

「騒いでもないし、野次も飛ばして無い」

「じゃあ僕に興味があるのか？」

「誤解されるような言い方だな。別に興味など無いよ、ただ車に轢かれて駄々をこねている少年の表情が気になっただけだ」

「興味があるんじゃないか」

「好奇心だ」

「同じだろう」

「ちょっと違う」

何処かの蝉は再唱する。

「少年、君は何歳だ？ 少年だと思っていたが、近くで見ると少し大人びた顔をしているな」

「九月の一日で十七歳だ」

「……少年ではなく青年だったか。これは失礼」

「別にいいよ」

十七歳。高校二年生。夏休みも終わりの頃に轢き逃げに合うとは何とも気の毒な事。

「うん？ 九月一日？ もう直ぐではないか」

「ああ、あと四日」

つくづく気の毒な事。これでもし身体に異変が出たら祝いどころではない。

「……やはり救急車を呼ぼう。きちんと検査してもらって無事に誕生日を迎えろ」

一年に一回の大切な記念日だ。どこぞの人でなしが崩して良いものではないだろう。

「だからなんとも無いから大丈夫だって。問題なく迎えられるよ」

「本当に強情な奴だな」

「違う、我儉なのだ」

「わかったわかった。同じ事を繰り返すな」

「おっさんが悪い」

何が悪かったのかわからないが、少年 もとい青年には病院へ

行く意思が無い様だ。本来なら、此処は無理強いしても連れて行くべきだろうが、この青年は如何にも御せそうにない。

「おっさんはいくつなんだ？」

いつの間にか、青年はまた天を仰いでいた。

「歳か？ 私は三十から二つ数えたところだ」

「三十二歳か。僕の倍だな。やっぱりおっさんだ」

「ああ、おっさんだ」

「そのおっさんは今何をしているんだ？」

「私は小説家を生業としている」

「……生業の話じゃないよ。おっさんは今ここで何をしているかって聞いたんだ。おっさんの生業なんか興味ない」

憎たらしい奴。

「……買い出しの途中だ。娘に頼まれてな」

「娘がいるのか。いくつだ？」

「七歳だ」

「そうか」

「そうだ」

可愛い盛り、と誰しもが言う。毎回毎回、会う度会う度、繰り返し繰り返し、誰もが言う。もう七年。長い盛りだ。いつもその娘にこき使われている父としては憎たらしいだけである。

「何買つて来いつて？」

「プリンだ」

「……プッチンか？」

「……プッチンだ」

小娘に顎で使われる哀れな父。しかも、暑さ極まるこの時刻に合わせ駄々をこねたところを見ると、きつと計画的な悪意だ。

「仕方ない。子供は駄々をこねるものだからな」

「では君も子供と云う事だな」

「でっかい子供だ」

「迷惑至極」

子供は駄々をこねる。それがきつと子供の感情表現のやり方なのだろう。上手く言葉を紡ぎ裏表のある薄汚れた感情を表現する大人に比べれば可愛いものだ。

「ところで、君は何故車に轢かれた？ のろまなのか」

この細道で速度を上げる者など、そうはいない。現に、轢かれたと言う青年がこうして外傷無く元気に喋っているのだから、青年を轢いた車も然程速度は出していなかった筈。

「子供がね」

また子供。

「……子供が急に飛び出したんだ」

「車の前を？」

「ああ。丁度ほら、おっさんがさっき歩いていたわき道があるだろう？　そこからタイミング悪く飛び出してきた」

確かにあのわき道がこの本道に合流する所は、墓地に隣接する民家の塀で左右の見通しが悪い。背の低い子供なら視界は零だろう。

「それで、庇ったわけか」

子供を。

「ああ。……おっさんの言う通り、僕は間抜けなのろまだね」

「間抜けは言っていないぞ」

のろまも訂正しよう。

「それで、子供はどうした」

此処には大きな子供と、中年おやじしかない。

「……この世界は可笑いなんだ」

「何？」

「子供はさ、その運転手と一緒に逃げたんだよ」

ぽた。

また一滴、汗が額を伝い地に落ちた。

「……どう云う、意味だ？」

何故加害者と、もう少しで被害者になっていた子供が共に逃げるのだ。子供相手に口封じでもあるまい。いや、轢き逃げする様な外道だ、在り得なくもない。

「その二人、実は親子だったんだ」

「……」

啞然。

「まあ、正確にはわからないけど、その運転手 ああ、そいつは男だったんだが、子供がその男を見て、パパ、って呼んでいた」

「……」

絶句。

「男はさ、すごく驚いていたよ。そりゃそうだ、轢きそうになったのが自分の子供だったんだから」

「……それで、轢いた君を置き去りに、自分の子供は車に乗せて、一緒に逃げたわけか」

「ああ」

外道。

「その車は速度があまり出てなかったから、轢かれて吹っ飛ばされてもそんなに痛くなかった。でもびっくりしちゃってさ、少しの間放心状態だったと思う。その隙に逃げられてしまった」

「ナンバーは？」

「見てない。車種も……車に詳しくないからわかんないな」

「……いや、しかし待て。青年の倒れている場所からその車はどうやって逃げた？」

青年の横側には車が通れる程の隙間など空いていない。この細道では転回も不可能。と云う事は後退して逃げたのか。

「隙間は空いていたよ」

「何？」

「僕が吹き飛ばされた位置はここじゃない。その右側の墓地の道端

だ。だから車は僕の横を通って、そのまま真直ぐ進んで逃げたよ」

「……では、君は轢かれてからわざわざ道の真ん中へ自分の意思で移動し、寝転がったと言うのか？」

わけがわからない。理解ができない。

「だから、僕は駄々をこねているんだよ」

ああ、そうか。そう云う事か。

「青年、君は」

「僕は思う。この世界は可笑いなんだって」

「……」

蝉は、その鳴き声をかがり火にして自身の命が削れていつている事を、知らせた。

「いや、世界が可笑いんじゃない。可笑しいのは、人間、なんだよ」

「君は」

「ずっと、ずっと前から思っていたんだ。いや、わかっていたんだ、僕は、人間が嫌い、なんだって」

彼にも知らせなければ為るまい。
しかし、かがり火は何処に在るのだ。

「同じクラスの子が酷いいじめにあっているんだ」

探せ。

「違うクラスの子が両親から酷い虐待を受けているんだ」

彼を導くかがり火を。

「下級生が先生から酷い体罰を与えられているんだ」

探せ。探し出せ。

「そして、その子達はもうこの世にいないんだ」

自身が灯せるかがり火を。

「可笑しいだろ？ 彼等は何も悪い事はしていないんだぞ？ 罰つてのは罪を犯した人間に与えられるものじゃないのか？ ……教えてくれ、彼らの罪とは何だ？」

罪は、罪は。

「教えてくれ、彼らの罰とは死ぬ事なのか？」

罰は、罰は。

答える。応えれない。

「もう、見たくない。もう、泣きたくない。もう、憎みたくない。」

もう、笑いたくない。だから、駄々をこねていたんだ。僕は、この世界に、駄々をこねていたんだ。ふざけるな！ いい加減にしろ！
何で罪も無い人を傷つけて笑っているんだ！ 何で自分の子供を甚振って笑っているんだ！ 何で守ってやるべき生徒を殴りつけて笑っているんだ！ 何で子供を助けてやったのに逃げるんだ！ みんなみんな狂ってる！ 氣付きもしないで嗤ってる！ もう嫌だ。もう沢山だ。みんなみんな消えてしまえ。でも消えないんだろう！ 駄々をこねても変わらない。我儕言っても変わらない。もう、僕は笑えないよ」

「 笑えるさ」

見つけた。彼を導くかがり火を。

「笑えないよ。笑う奴しかいないから」

「君は笑える」

たった一つのかがり火を。

「笑えなくても良いんだ。僕はもう答えを見つけた。この汚れた世界を綺麗にする方法を」

「 死ぬ気だろ？」

「……ああ」

汚れた世界が変わらないなら、それを見る自分自身が消えれば良い。全ては無となり消えていく。……そう云う事だろう。

最初から、彼にとってはどうでも良かったのだ。車に轢かれた時

に死のうが死ぬまいが。子供さえ救えたのなら、その先自分が死ぬ事になっても、そんな事如何でも良かったのだ。寧ろこのまま死ねば良い、と思っていたのだろう。だからこそ救急車を呼ばれたくなかった。このまま世界に駄々をこねながら死ぬのが自分にとっての最良の死だったのだから。

「……本当は轢かれた時、地面に強く後頭部を打ったんだ。凄く痛かった。頭蓋骨が割れて脳みそが漏れ出してるんじゃないかってくらい痛かった。ああ、ここで僕は死ぬんだな、自分で死ぬ手間が省けて良かった、って思った。でも、痛みは直ぐに消えて、触ってみても頭蓋骨は割れてないし、そもそも血も出ていなかった。これじゃあ死ねないって思ったら、何だか僕を轢いた奴に凄く腹が立った。腹が立ったから何が何でも死んでやる！　って思ったんだ」

「……それで？」

「それで、道の真ん中に寝転がってやった。血は出てなくても、もしかしたら内部では出血してるかも知れない、そしてらいずれ死ぬだろうって。もしそれで駄目でも、ずっとここに寝転がっていれば熱中症や脱水症状になって死ぬだろうって思った。それで、本当にここで死ねたら、僕を轢いて放置したあいつに与えられる罰は大きくなるだろう、ざまあみろって、そう考えたんだ」

彼はここで死ななくても、いずれ死んでいたのだろう。自分で自分を殺して。

「それは八つ当たりだ」

「うん。最初に言ったよね？　これは八つ当たりだって。他の車に對してじゃない。あいつの所為にして死ぬ為の八つ当たり。本当は

駄々をこねてすらいなかったんだ」

さあ、ここからだ。

「そして、暫く経った頃に雪駄の擦れる音が聞こえたんだ。……ざつ、ざつ、てね」

ざつ、ざつ。

立ち上がり、青年から少し後退した。

青年の全てが見渡せる位置。

「だからおっさん、僕の事は放つといて、さつさとプリンを買いに行けよ。娘が待ちわびているぞ？」

「……断る」

「何だつて？」

青年は、不可思議な表情を浮かべこちらを見る。

「青年。君は正しい道筋に導かれなければならない」

「正しい道筋？」

「君の言う通り、世界は、いや、人間は可笑しな生き物だ。同じ群れである筈の仲間を傷つけ壊し命を奪う。全く愚かしい生き物だ。だが、そんな腐った奴が蔓延る群れの中にも、君みたいに命の理を知る者がいるんだ。その理を知るものこそ、生きて他の者にもその理を教えるべきだ」

「僕が何をしても、誰が何をしても、何も変わらないよ」

「変えられるものだけでいい。全てを望んだ事が、君のそもそもの間違いなんだ。全てを変えるなんて不可能なんだよ。個が全を得る事は出来ない。全とは個で出来ているのだからそれは当然だ。だから個は個にぶつかれば良い。少しずつ、君の瞬間で、君が思う様に、世界を変えていけ」

「……無理だ。一つを変えても、違う一つに変えた一つを消されてしまう。きっと永遠に続くぞ」

「なら永遠に変えていけ。消されても消されても、君が消えなければ何処かの誰かはきっと救われ続ける」

「……」

親に轢かれるところだった子供を救った様に、報われなくても、褒められなくても、彼が変えた結果は残る。その子供は生きているのだから。

「これはかがり火だ」

「……かがり火？」

「間違えた君の道筋を、正しい方へ誘うしるべ。君を生かすかがり火なのだ」

唯一灯せたか細い光。

「そのかがり火、とはなんだ？」

「言葉さ」

言葉を綴る生業が、彼を導く光に為る。

「生きる」

彼も、他の迷子を導くかがり火と為れるだろう。

「……笑えるかな？」

「ああ、いつだって笑えるさ」

簡単だ。

「わかった、もう少しだけ生きてみるよ」

「ああ」

「だけど、もしどんなに頑張っても笑う事が出来なかったら、その時は」

「また私が導いてやる」

何度でも。永遠に。

「お節介だな」

「世話好きなのさ」

「同じだろう」

「ちょっと違う」

ぽた。

青年の額から一滴の雫が地に落ちた。

「……今日は暑いな」

青年はよたよたと立ち上がる。

「ああ、暑い」

二人で真青な天を仰いだ。

「風が無い」

「ああ、風死す、だ」

「でも、生きている」

「そう、生きている。君と同じ様に、今は迷っているだけだ」

迷っても、迷うからこそ、強く吹く。

「そうか」

「そうだ」

明日はきっと。

「それにしても、喉が渴いた」

「青年、君は馬鹿だな」

「違う、馬鹿なだけだ」

「同じだろう」

「ああ、同じだ」

馬鹿と馬鹿は、正反対の方角へ歩き出した。

それから幾年後の夏、自宅に一冊の本が届いた。

それは自身が書いた幾作目かの小説。

送り主の名前も住所にも見覚えはなく、その本以外は何も無い。

本を持ち、真昼の陽光差す縁側に座した。そして自身が書いたその小説を一ページ一ページ流す様に捲る。

稚拙な文章、後先考えてない構成、しつこく無意味な言い回し、題材を上手く御しきれず、振り回されて矛盾を孕んだまま仕上がった駄作。ページを捲る度に羞恥の発汗が身体に浮き上がる。だが捲り続ける。何かに、導かれる様に。

笑っている。それが、人の在るべき姿なのだから

……題材であり作品の結びでもある文章が書かれた最後のページに辿り着き、そこで見つけた。結びの文の横の空白に、手書きで加えられた、一文を。

立ち上がる。

「……」

行かねばなるまい。もう一度。

あの道に寝転がっていなくても。

あの墓地の何処にも眠っていなくても。

行かねばなるまい。

『おっさん、僕は生まれた日に帰るよ』

意味がなくても。

『やっぱり、駄目だった。だけど、一つだけ叶った事がある』

もう一度導く為に。

『風死す炎昼に、馬鹿は』

かがり火を、灯して。

『笑うんだ』

行かねばなるまい。

九月一日、

自宅を出ると

風は、生きていた。

さよなら、心友

「……真来ちゃん、あのね、私……死ぬことにしたんだ」

屋上を舞う初嵐が未玖の真黒な細髪を揺らした。

真来は未玖の小さな背を見る。遠景に沈み行く日の紅が、フェンスの網目を抜けて未玖の背に陰を生んでいた。

「……もう、限界なの」

未玖の瞳には何が映っているのだろう。

眠りに向かう日の紅が。

眠りを迎える街々か。

背を見る真来にはわかる筈もなかった。

「……心が、壊れそう」

未玖は顔を上げ、空を仰いだ。そこも紅に染められている。

真来は右手を自分の胸に当ててみた。

心。

それは何処に在るのだろうか。

右手に伝わる規則的鼓動。だけどそれは心じゃないと真来は知っている。肉と骨に包まれたそれは生きる為の器官で、体の中には器官しか入っていない。無駄は一切無く、きつと余分な隙間すら無いんだ、と真来は思う。

では、心は何処に。

隙間は無い。

在ったとして、それは生きる為に必要なのか。生体に不必要な器官は無い。隙間が在っても、必要なら生まれ無い。無意味な器官など、産声を上げた時に持たされてはいないのだから。

「みんな、何で私を苛めるんだろうね？」

完全下校時刻を告げる放送が流れた。

「今日、机に入れてた教科書、全部鋏で切られていたの」

瞳を下げれば、そこには自分を虐げた生徒達の帰宅姿が見えるのだろうか。未玖はずっと空を仰いでいる。真来には日の紅と背の黒しか、見えない。

「体操着も、鞆もズタズタだった。昨日はうち履きと筆箱に悪戯された」

上を向く未玖、下を向く真来。

地を踏む未玖の足には件のうち履き。白い布に鮮やかな彩色で描かれた侮蔑。消そうとしたのか、所々に滲みぼやけた色がある。

真来はまた未玖の背に目を向ける。いつの間にか、未玖もまた遠景に視界を戻していた。

「いつまで続くのかな。いつまでも続くんだろうね。きっと」

でも、もう終わり、と未玖は笑った。

「やる方が終わらないなら、やられる方が終るしかない、よね？だから、もう終わり。今日で、終わり」

未玖は一步、フェンスに近づいた。真来の瞳に映る黒が、遠のく。

「本当を言うと、心はもう壊れていたの」

ずっと昔に、とまた一步。

「私は汚いんだって。私は臭いんだって。私は気持ち悪いんだって。汚いから触るなって、臭いから近寄るなって、気持ち悪いから死んでくって。みんなみんな、同じ事を言うの。小学校でも、中学校でも、そして、今でも」

さらに一步。

どんどん未玖の背が小さくなる。真来はそれでも見続けた。

「言われる度、避けられる度、心が、痛むんだ。痛んで軋んでひびが入って、そして壊れちゃった」

そして未玖はフェンスに辿り着く。

紅が差す屋上。

紅が落ちる地面。

それを隔てる一枚の網。

命の境界線は、脆弱すぎて防壁にはなっていない。

未玖は網に手をかける。

「それでも今日まで私が生きてこれたのは、真来ちゃんがいいたから。真来ちゃんだけが、私を苛めなかった。無口で、慰めたり励ましてくれたりはしないけど、それでも私を避けずに傍に居てくれた。それだけで、私は救われていたんだよ？」

救われた。

心が、救われたのか。

何処に在るのかわからない、心が。

「ねえ、真来ちゃん。私たち、親友　だよね？」

未玖は綱に足をかけ、フェンスを上る。

「……違う」

真来の言葉に、未玖は足を止める。だが振り向きはしない。

「ボクとキミは、きっと親友ではないと、思う」

秋の肌寒い風が吹く。

「……そっか、やっぱり、そうなんだね」

未玖はフェンスを反対側へ降り、屋上の縁へ立つ。そこから先に、境界線はもう無い。

「未玖、心って、何処に在るんだろうね？」

「心は、どこにでも在るよ」

「何処にも、見当たらない」

「ううん。心は、見るものじゃなくて、感じるものなんだよ。真来ちゃんにも、心が在るんだよ」

「在るのかな？　それって、未玖と同じもの？」

「うん、そうだよ。心はみんな同じものの」

「そっか。じゃあ、やっぱりボクとキミは親友じゃないんだ」

真来はフェンスに近づく。未玖の背は網目に切り取られていて、何処か遠く感じた。

「じゃあ、そろそろ、行くね」

「うん。わかった」

「さよなら、真来ちゃん」

未玖は飛び降りた。

瞬間、真来の意識は、がくんと揺らぎ、視界から未玖とフェンスが消えた。

縁。フェンスの向こう。網目に切り取られていない世界が真来の瞳に映る。

「……未玖、頑張ったね」

真来は自分が履いているうち履きを見た。鮮やかな彩色と、心無い言葉。

「キミの心は壊れていない。ボクの心が壊れていないから」

真来は空を仰いだ。紅い、空を。

「さよなら、心友^{しんゆう}」

屋上を舞う初嵐が真来の真黒な細髪を揺らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6208z/>

[短編集]心音響く、空の下

2011年12月20日21時46分発行